様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年　5 月 16 日現在

機関番号：12501
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2008～2010
課題番号：20520210
研究課題名（和文）　文学と移動：ディアスポラ小説と手紙

研究課題名（英文）　Migrating Words: Diaspora Fiction and the Letter

研究代表者　時實　早苗
（TOKIZANE SANAE）
千葉大学・文学部・教授
研究者番号：80070514

研究成果の概要（和文）：アメリカ・エスニック文学を検証することによって、人間の移動に関わる問題、ディアスポラ、国境、ハイブリディティ、ホームなどの概念と手紙が深い関わりを持つことを明らかにした。またそれはさらに手紙をこえて、移動するさまざまな言語の問題に展開しうることを示した。その成果は論文や口頭発表の形で発表しただけではなく、他の研究者と問題を共有し議論するために、２０１０年６月、イェール大学教授 Wai Chee Dimock および２名の海外協力研究者他の参加を得て、千葉大学において国際シンポジウム “Migrating Words”を組織し、開催した。

研究成果の概要（英文）：The international symposium “Migrating Words” was organized by the scholar concerned and held at Chiba University, with the participation of Prof. Wai Chee Dimock of Yale University as a keynote speaker and of two European scholars, the overseas collaborators, as lecturers. The papers on the research subject were read at this and the other international conference and/or published in a book and a journal.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	900,000	270,000	1,170,000
2009 年度	700,000	210,000	910,000
2010 年度	1,500,000	450,000	1,950,000
年度			
年度			
総　計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学
キーワード：米文学

１．研究開始当初の背景

（１）　まず本研究者が長年行っている手紙の研究、特に手紙と小説の研究がある。本研究者は２００８年に出版した『手紙のアメリカ』において、アメリカ小説における書簡体や小説の中の手紙とともに、移民の国アメリカにおける人間の移動と手紙という言葉の移動との関連に注目し、エスニック小説における手紙の研究に着手していた。この研究については、すでにフィンランドやポーランドにおける国際会議で発表を行い、同じ関心を持つ研究者との交流も行ってきた。この研究においては、次に述べるような、現代の文学研究のグローバルな発展と結びつく側面とともに、手紙の本質についての問題がある。それはすなわち、手紙が言語であり、文字であり、文学であるという点において、書き言葉としての文学の本質の探求に結びつくものである。

（２）　さらに学問的背景としては、現代ポ

ストコロニアリズムからトランスナショナリズムへと展開してきている文学批評における、ディアスポラの問題への注目がある。本研究者は、Paul Gilroy や James Clifford などの提唱する、世界的、脱地域的広がりを持ち、人間の流動性一般を表象しうるディアスポラの概念に注目してきた。ポストコロニアリズム、そしてトランスナショナリズム、グローバリゼーションというように、国家の枠組みを超えた文学研究が広がっていくなかで、国家の枠組みをはみだし、「ホーム」の観念にあらがう存在としてのディアスポラが、その重要な要素のひとつとなっているが、本研究者は、このようなディアスポラの流動性が他者を内包し、移動・越境を内包する手紙の流動性と深く関わっていると考えてきた。それは、単に表面的に、移民小説、言い換えればディアスポラ小説に手紙を扱う例が多いということだけではなく、手紙が人間の移動や越境の本質を意味するということであり、それはすなわち、言葉の移動としての文学が人間の移動と本質的に関わることを意味すると考えられるからである。

（３）　さらに最近では、Wai-Chee Dimock 他の *Shades of Planet*(2007)に見られる「惑星的視点」すなわち「世界文学」という視点が、トランスナショナルな文学研究の動きにおいて特に注目されている。そこにおいては、人間とことばが国境を越えるという物理的な動きが、文学の形式・本質に影響を与え、やがては文学自体の流動性を生み出すという経緯が明確に示されている。このような視点をとりいれることによって、現代を象徴するディアスポラの状況(ディアスポリティ)はますます重要な意味を持つようになっている。そして、ディアスポリティが文学上いかなる意味を持つか、またディアスポラ文学によって現代の社会や文化をどのように解明できるか、という問題も出てくる。これによって、単にディアスポラと手紙の関係が深いということにとどまらず、文学とディアスポラの関係を考察することが、現代の社会と文化の洞察につながる可能性が考えられる。

２．研究の目的

（１）手紙がディアスポラ文学にさまざまな形で関わっていること、そしてそれが文学の国境を越えた広がりと関連することを明らかにする。まずは、移民文学における人間の移動と、移動する人間が必然的に依拠することばの移動、すなわち通信や手紙、外国語や翻訳といった概念に着目する。書簡体を含む現代小説は移民文学には限らないが、とりわけ移民文学においては、手紙が人間の移動と直接関わり、現実に国境をへだてた連絡をするために、あるいは歴史をさかのぼるために、手紙が用いられている。またその同じ理由で、手紙が物語の内部に用いられている例も多く見受けられる。このような作品を分析することによって、人間の流動性と手紙の流動性との関わりを明らかにする。さらには、人間のディアスポラ状況の持つ積極的な意味に、手紙という概念がどのように寄与しているかを、考察する。

（２）そのために、ディアスポラ自体の概念について、研究を深める。ディアスポラは、物理的現象から哲学的な意味へと展開してきたが、それに対しては批判もある。その両方の立場を検証しつつ、哲学的な、現代の人間の状況の代表としてのディアスポラに注目したい。そして、移民小説において、ディアスポラがどのように表象されているか、あるいは物理的現象から哲学的意味への展開のプロセス、そして結果としての普遍的ディアスポリティがどのように記述されているか、そこにおいて「ホーム」の意味がどのように変化しているかを考察する。さらに、このようなディアスポラの概念と、手紙が具体的に、あるいは理論的に深く関わっていることを証明したい。

（３）手紙、もしくは移動するさまざまな言語現象が、文学、とりわけ小説の生成と深く関わっていることを明らかにする。ディアスポラ状況にいる人間が、文学によって自らの状況を認識すると同時に、その重要性をひろく訴えかけている。文学・小説そのものが移動する言語であることを明確にし、人間の歴史的状況における文学の意味を再認識する。

（４）同時に、ふりかえって手紙そのものの本質を理論的に示したい。手紙の定義はいろいろありうるが、移動する言語という定義は、書き言葉としての本質を示すものである。また、その移動において「ホーム」がその意味を喪失しうることを、手紙の宛先（および／あるいは差出人）の喪失と結びつけて論じたい。

３．研究の方法

（１）いくつかのアメリカ・エスニック小説をとりあげ、さまざまな形でのディアスポリティ、人の移動と手紙との関わり、および手紙の意味を論じる。とりあげたのは手紙と関連するアメリカ移民小説２作品と英国人によるアフリカ系アメリカ人についての小説１作品である。

①まず作品研究をおこなった。３つの作品はそれぞれ、メキシコ系アメリカ人 Ana Castillo による *The Mixquiahuala Letters*、ハイチ系アメリカ人 Edwidge Danticat による *Breath, Eyes, Memory*、カリブ海出身のイギリス人 Caryl Phillips による *Crossing the River* である。これらの作品について、それぞれの作品の分析をおこない、そこにおけるさまざまな形態の手紙の意味を研究し

た。
②さらにそれぞれの小説に関し、理論的、および歴史的な補助的な研究を行った。まず、ディアスポラの概念を、最新の研究を含めて整理した。とくに、*Crossing the River* と、Paul Gilroy の *Black Atlantic* (1993) との比較が多く論じられているので、Gilroy のディアスポラを検討した。さらにその流動性と、さらに同じくカリブ海地域出身の Edouard Glissant のディアスポラの流動性とも比較し、手紙の性質との類似を見いだした。
③*Crossing the River* について、とくに「ホーム」の概念について歴史的な背景研究が必要だったので、アフリカ系アメリカ人をアフリカに再入植させるという American Colonization Society の歴史的役割と意味、評価の研究を行った。
④*The Mixquiahualla Letters* に関連して、とりわけメキシコ系アメリカ人にとって重要な意味を持つ border theory (国境理論)の研究を行い、とりわけ国境横断と手紙の関係に注目した。
⑤*Breath, Eyes, Memory* との関連では、通信機器の発達と文学の関係という観点から、メディア論の研究を行った。
（２）これらの小説における手紙の本質的意味を考察するために、手紙と文学の関係を示す広い範囲の研究書を検討した。これには、書簡体小説の研究から、それに関連したイギリスの郵便制度の研究、手紙のマニュアル研究、手紙の存在論的研究などが含まれる。
（３）本研究のトランスナショナルな方向性を確実にするためには、研究過程、およびその結果において、世界的視野を欠かすことができないと考え、海外の研究者と協力し、最終的にその成果を国際学会の形式で発表することは当初からの目的であった。そのために、すでに交流のあったフィンランド、トゥルク大学の Pirjo Ahokas 教授とポーランド、ウッジ大学の Jadwiga Maszewska 教授を海外研究協力者として迎えることとした。彼らはそれぞれにすぐれたアメリカ移民文学の研究者であるが、アメリカ以外の地域で研究を行うという点で本研究者と同じ立場に立ち、しかもヨーロッパという異なる視点を提供することができる。Maszewska 教授はチカノ（メキシコ系アメリカ人）文学の専門家で、Castillo の研究に示唆を与え、Ahokas 教授はユダヤ文学研究家としてディアスポラの研究に協力したり、アフリカ系アメリカ人、アジア系アメリカ人など、異なる作家や領域の研究を提供することによって、本研究に大いに寄与した。

４．研究成果
（１）とりあげた３作品について、論文を完成し、発表した。”Epistolarity and Border Crossing in Ana Castillo's *The Mixquiahuala Letters*” においては、小説の書簡体が、定説となっているフェミニズムの意味だけでなく、越境理論と深く関係していること、手紙の越境が想像力の越境を作り上げていることを立証した。”Letters and Crossing” においては、アフリカに「送り返された」主人公が、ホームを捨て、ディアスポリティを積極的に受け入れることを、その手紙の中に、あるいは手紙の本質の中に読み取った。「エドウィージ・ダンティカの『息、眼、記憶』と「声」の手紙」においては、カセットテープによる声の手紙が、カセットという機械の形でアメリカの抑圧とハイチの被抑圧を表象し、反対に書き言葉の持つ転覆性を示唆していることを論じた。これらの論文は、単にアメリカ移民文学にとどまらない広がりを持つが、一方でディアスポリティと手紙という点で結びつき、多様でありかつ現代的も重要な問題を浮き彫りにすることに成功した。これらの論文は、それぞれ学会での口頭発表、雑誌、書籍論文集、などの形で発表した。
（２）研究期間中２００９年４月から９月まで海外研修の機会を得て、イェール大学で研究を行った。同大学図書館、および Library of Congress においては、とくに American Colonization Society の研究と手紙の研究を行うことができた。またイェール大学では、同大学の著名な教授の知己を得ることができた。ひとりは本研究の対象作家である Caryl Phillips で、インタビューを行い、作品について、あるいはディアスポリティについて質問することができた。その結果は発表しない約束であったので、いずれの研究成果にも直接引用していないが、本研究には大いに参考になった。もうひとりは、World Literature の提唱者として名高い Wai Chee Dimock で、彼女には本研究の意義と、その一環としての国際シンポジウムを行う計画を説明し、協力を要請したところ、快諾された。Dimock 教授はまた、Facebook の World Literature に関するディスカッショングループに参加させてくれた。またこの海外研修期間およびそれ以前の国際会議の機会をとらえ、二人の海外共同研究者とそれぞれ研究交流を行うことができた。研修期間の最後には、インディアナ州の Purdue 大学の友人に招かれ、「日本とアメリカ文学」という題で大学院の授業を一時間行った。
（３）最終年度には、計画通り成果の発表と国際研究交流をかねて、本研究者個人で国際学会を組織し、千葉大学の支援、日本アメリカ文学会の賛同を得て、開催した。２０１０年６月１２日、千葉大学において、移動する人々と移動する言語の関係を探るという趣旨で、International Symposium,

“Migrating Words”が開催された。シンポジウムには基調講演者として Wai Chee Dimock 教授を迎え、海外研究協力者の Ahokas 教授と Maszewska 教授を講演者として招請した。このほか、和光大学の余田真也教授、および千葉大学の Myles Chilton 准教授が講演者として参加し、本研究者は司会者兼講演者を務め、”Letters and Crossing”を発表した。多くの研究者、学生が参加し、広く問題を共有することができたばかりでなく、このシンポジウム、およびその前後の参加者の討議を通じ、課題について貴重な議論を重ねることができた。シンポジウムの Program および Proceedings はウェブを通じて発信した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

① 時實早苗、Crossing and the Letter: Caryl Phillips's *Crossing the River*, 千葉大学「人文研究」第４０号、査読無、2011, 37-72.

〔学会発表〕（計２件）

① 時實早苗、Epistolarity and Border Crossing in Ana Castillo's *The Mixquiahuala Letters*, Hawaii International Conference on Arts and Humanities, Jan,9,2011, Hilton, Honolulu.

② 時實早苗、The Letter and Crossing, International Symposium “Migrating Words,” 2010 年６月１２日、千葉大学

〔図書〕（計２件）

① 時實早苗、他　風間書房、『異言語と出会う異文化と出会う』、2011, 259-277（エドウィージ・ダンティカの『息、眼、記憶』と「声」の手紙）

② 時實早苗、他　（翻訳）法政大学出版局、『バイオフィーリアをめぐって』、2010, 95-247, 349-433

〔その他〕
ホームページ等
http://migratingwords.com/

６．研究組織
(1)研究代表者　時實　早苗
（TOKIZANE　SANAE ）
千葉大学・文学部・教授
研究者番号：80070514

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：